



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

スラバヤ日本人学校における国際理解教育と実践

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山田,文乃 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00174174

スラバヤ日本人学校における国際理解教育と実践

前スラバヤ日本人学校 教諭

大阪府大阪市立萩之茶屋小学校 教諭 山田文乃

キーワード：現地理理解教育，地域から学ぶ，子どもの自尊心を育てる

1. はじめに

国際理解教育の研究を始めて10年。在外施設に赴任する機会を得て、海外に住むという貴重な体験を通して、日本とは異なるアプローチで、子どもの今後の生活においてプラスになるような現地理理解教育に取り組むことができた。異文化の中で子どもたちの自尊感情を高めうる活動の一部を紹介したい。

2. 教育活動を取り巻く状況

(1) スラバヤ日本人学校の概要

戦前の1925年にインドネシア初の日本国民学校として開校しているほど、スラバヤは古くから日本とは関わりが深い地でもあり、親日感情の強いところでもある。全校児童生徒数50～80人のスラバヤ日本人学校は、各学年1クラスの小規模校である。日系企業に勤める父親と一緒に来尼し、3～5年で帰国する子どもが多い。また、インドネシア人女性と日本人男性の国際結婚家庭の子どもたちも少なからず在籍し、幼稚園から中学部までスラバヤ日本人学校で学ぶこともある。

(2) 保護者や地域の要望と現状

恵まれた環境にありながらも、保護者にとってはやはり子どもの学力が一番の心配事であり、帰国したときに遅れをとらずに日本の学習について行けるだけの学力をつけることが、学校への要望として高い。この、現地理理解教育よりも学力保障を重視する傾向はとても強く、小さなコミュニティーの日本人社会では、現地の文化や風習を積極的に学び取り入れようとする姿勢は受け入れられにくい。また、言語面のつまずきがみられるダブルの子どもたちや家庭に対する厳しい目もあり、インドネシアに対するネガティブなイメージが、保護者だけでなく子どもたちにも定着しつつある。

(3) 継続して行われている特色ある取り組み

そのような状況の中で、スラバヤ日本人学校では継続的に取り組んでいる活動がある。週1回のインドネシア語の学習は、子どもの語学力に応じたクラスを編成し、日本語の話せるネイティブスピーカーが生活に密着した表現を中心に教えている。英会話は週2回、学年団ごとに行っている。また、学校として年間を通じて交流を行っている小学校を訪問したり、来校したりしてもらって、親交を深める活動も行っている。毎年11月に開かれる『国際文化交流会』では、伝統的なインドネシアの踊りや歌などを交流している学校の子どもたちが披露してくれる。総合的な学習の時間を『スラバヤタイム』と名付け、スラバヤやインドネシアに関わることの現地理理解学習を進めている。

3. 実践記録

学校として継続的に取り組んでいる上記の活動を元に、子どもの自尊感情を高めることができる発展的な学習を総合的な学習の時間等を活用し取り組んだ。その現地理理解教育の実践を活動内容で4つに分類し、下に紹介する。

(1) 生活に触れる

日頃、ドライバーの運転する車で通学し、買い物はショッピングモール内で保護者と一緒に済ませる子どもにとって、現地の人々の生活を垣間見ることは大きな発見の連続になる。実際に徒歩で学校周辺を探検し、人々と直接ふれあう学習では、民家を訪問し、井戸で水くみを体験させてもらった。また、現地通貨を使用し、ワルンと呼ばれる駄菓子屋のような店でインドネシア語を使っておやつを購入するなど、これらを通して、日本との相違点を発見できた。また、乗り合いバス（アングタンコタ）や人力車（ベチャ）などの乗り物は、見たことはあっても乗ったことのない児童が大半である。町中ではなく学校内で体験する機会を持つことで、安全面を確保しながらも車から見える町の様子を身近なものとして感じるきっかけとなった。市場（パサール）探検では、スーパーマーケットとの物価のちがいや商品の新鮮さ、品数の多さに驚き、日本人児童が見学に来たことを知ったお店の方々からジュースやおもちゃなどをいただけるうれしいハプニングもあり、その優しさに触れることができた。現地理解教育の原点とも言うべき活動は、縁あって住んでいるこの地への親しみをさらに高めることができた。



パサールにて商品の陳列方法に驚く

(2) 体験して感じる

偏見や先入観ではなく、実体験を通して自分の言葉でインドネシアの生活を語れるように、体験する機会も多く持った。まず、日本ではできないマンゴーやバナナの食べ比べなど、南国ならではの活動を行った。見た目が悪かったり美味しくないイメージが先行していたりするため、食わず嫌いであったドリアンやジャックフルーツ、スネークフルーツなども味わった。一口しか食べることでできない児童もいたが、案外美味しく食べることできるものもあり、一人一人の感じ方のちがいを味わう活動を通して学ぶこともできた。また、現地の学校を訪問し、通常授業を受けてみて、そのちがいも体験を通して学ぶことができた。インドネシア人保護者の協力で料理にも挑戦し、甘すぎるイメージの強かったインドネシアスイーツが日本人の口に合うことも知った。普段の生活ではどうしても表面的な情報に左右されがちであるが、本質に迫る現地理解教育を行うことで自分の頭で思考・判断・表現する大切さを学ぶことができた。

(3) 実物に触れ、文化を知る

日本に帰国してから、滞在していた国について聞かれることもある。先生から聞いた、本で調べた程度の知識だけでなく、体験した上での情報や感想が付け加えられたら、思い入れの強い文化紹介となるだろう。インドネシアの音楽として代表的なガムランは、音楽を専門に学ぶ高校へ出かけ、高校生に教えてもらった。竹でできたアングロンは運ぶことのできる楽器なので、クラブ活動として行って



ガムランの演奏方法を高校生から学ぶ

いる高校生に日本人学校へ来てもらい、演奏のあとに体験までさせてもらった。通常夕方から朝方まで一晩中行われるワヤン（影絵芝居）は、プロの方をお招きし、本物のワヤンを学校で鑑賞し、その精緻な作りを間近で見ることもできた。また、東ジャワ州で一番大きいモスクを訪問し、生活の中心に宗教があるということを学ぶことができた。いずれの活動も日本文化をよく理解している学校の通訳が同行し、学びを深める一躍を担ってくれた。このような文化理解の活動を通して日本とのちがいをを感じる機会を多く持つことで、ちがいをよさとして受け入れられるようになり、帰国後インドネシアでの生活をプラスに捉えることができるにちがいない。

(4) 学びを、相手意識を持って伝える

見たり聞いたり体験したりしたことをまとめる活動を行うときに、伝える活動と組み合わせることで、より学びが深まる。校内の発表会では、低学年にもわかるようにと大切なところを絞って、わかりやすい発表に仕上げた。インドネシア人には、難しい表現はできないが一对一で身振り手振りを入れて日本のよさを伝えた。日本の同世代の子どもたちにはインドネシアのよさを個人新聞にして知らせ、同じ国内の在外施設の子どもたちには町のよさをかべ新聞にして伝えた。他国の在外施設の子どもたちには写真入りのリーフレットに、インドネシアの生活を元にして相手の国のくらしを尋ねる手紙を添えた。このような相手意識を持った表現活動は、自国の文化や相手の文化を知り、自分と相手の相違点を理解した上でなければ行えない。必要な内容を相手にわかりやすく伝える活動を通して、思考力・判断力・表現力を高めることができた。

4. おわりに

まだまだ安全面、衛生面に問題があり、日本とは異なる現地ならではの工夫や配慮が必要な場面があったが、そこを克服すればいろいろなよさを発見する機会を持つことができる。

また、フルーツの食べ比べや町探検など、活動への協力を依頼する形で保護者の参加を求めるようにすることで、活動の本質を見てもらうことができ、活動に対する理解も得られる。その上、保護者を巻き込んだ活動を組み立てれば、親子一緒に学ぶ機会を持つことになり、学びをその後の生活に生かしやすくなる。体験だけに終わらない指導計画をしっかりと立てることで、その重要性を理解してもらうことができた。

車の窓から見える町の風景だけではインドネシアのよさは語れない。現地の人々のくらしは体験して初めてそのよさに気づくことができる。見た目やちがいで判断するのではなく、一人一人と向き合い、個々の出会いやつながりを大切にすることが、その国を好きになるきっかけになるのではないだろうか。ちがいをよさとして受け止められる子どもを育てるためには、相手の立場に立って物事を考える力、すなわち「想像力」が必要となる。現地での国際理解教育とは、在外施設で学ぶ子どもたちにとって、海外に住むという貴重な体験を今も未来も肯定的に捉えるために必要不可欠なものである。日本国内での活動以上に、在外施設での一人一人の子どもの未来を見据えた地域理解教育は、セルフエスティームを高め、他者を理解するための大切な活動であると、実践を通して改めて実感した。